

## 渋谷竜太著 『都会のラクダ』

(KADOKAWA)



ロックバンド SUPER BEAVER (スーパービーバー) のボーカル渋谷竜太が記した十六年間のバンド史である。

金銀に染めたモシヤクシヤの髪、カメレオンのようなアイメーク、腕と指のタトゥー。こんな男が書く本なんてろくな本じゃないと読み出したものの、えっ、面白い。読み易い。私より十七歳年下の都会の若者の気持ち田舎のおばさんの心によく伝わって来た。何度も泣いた。

一日一章、寝る前に読むのが楽しみとなり、「本つていいね」と亡き子に語りかける。

〈友達であれ、親族であれ、一緒に仕事をするのが好きだ。互いが人生の一部を賭して真剣に向き合ったそれが誰かの人生に染み入るものになるなんて滅茶苦茶ロマンチックだと思っからである〉。後書きを読み、著者の母が編集者であることを知った。

すれ違いばかりだった息子と私を時間差でつないでくれた本だ。二年前に刊行された本を紹介することをお許しいただきたい。

(千葉クミ)

## ベルリン交響楽団演奏会福岡公演「未完成・皇帝・運命」

(2023年6月20日、福岡シンフォニーホール)



根っからの音痴である。唄うだけではなく耳もダメ。クラシックでわかるのは〈運命〉の出だしぐらい。どんな名曲もどこかで聞いたことはあるぐらいの音痴。

しかし、音楽会の雰囲気は好きだ。行きたいと思うが自分からチケットを買うことはない。そんな私に妻が勧めてきたのだ。初歩的な曲ばかりだから行かないかという。未完成、皇帝、運命。ベルリン交響楽団という名にも魅かれ、短歌の素養のために出かけることにした。

音響が自慢の福岡シンフォニーホールは耐震改修を終えたばかり。三階席まで人があふれている。〈未完成〉が終わり万雷の拍手の後、ピアノが設置された。ソリストはシヨパンコンクールのセミ・ファイナリスト、ピョートル・アレクセイヴィチ。天雷のような交響楽団とピアノの協奏。シエレンベルガーの指揮棒に両者が交互に高まつたり低まつたりする。若いソリストの体全体で表現する演奏は圧巻だった。一か月たつてもその姿が頭から離れない。音痴をも深く感動させてくれた演奏だった。

(中村仁彦)